

V 学修支援

本章では、日本語表現科目の学修を授業時間外でサポートする取り組みとして、学修相談に応じる「ライティング・クリニック」と、履修関連の相談に応じる「履修相談会」の2点を挙げ、それぞれの概要および成果を報告する。

1. ライティング・クリニック

(外山敦子)

- 1-1) 概要
- 1-2) 利用実績
- 1-3) アドバイザーの研修
- 1-4) 総括および今後の課題

2. 履修相談会

(櫛井亜依)

- 2-1) 概要
- 2-2) 利用実績
- 2-3) 総括および今後の課題

1. ライティング・クリニック

「ライティング支援」とは、指導者が文章を直接添削したり修正箇所を指示したりするのではなく、指導者との「対話」によって書き手自身が修正箇所を特定できるように支援することをいう。このようなライティング支援は、米国の大学の場合、主に「ライティングセンター」によっておこなわれ、学生のみならず教員も積極的に利用している。一方、日本では早稲田大学や津田塾大学に先進的な取り組みの事例があり、成果をあげつつある。

本学の日本語表現科目では、受講生同士の「対話」を通して思考を整理し、文章を練り上げる過程を重視し、成果を上げてきた（「II 授業報告」参照）。こうした授業における実績と成果をふまえ、「対話」を重視するライティング支援の場を教室の外にも設け、学生が必要に応じて利用できるよう、試験的に設置されたのが、「ライティング・クリニック」（以下、「クリニック」という）である。

1-1) 概要

1-1-1) 開室状況

クリニックは、平成 24 年度前期に、期間と対象者および対象とする相談内容を限定して、試験的に開室されることになった。理由は、本学でのライティング支援の需要を見極める必要があったためと、支援にあたるライティングアドバイザー（学部 4 年生・大学院生）の育成には時間を要するため、まずは相談内容を「日本語表現 T1・T2」の授業課題に限定する必要があったためである。

平成 24・25 年度の開室状況については、表V-1 の通りである。平成 25 年度はアドバイザーの人数が 4 人から 7 人に増えたため、前年度の利用実績をふまえて、文学部受講生に限定していた支援対象を、後期から全学部受講生に広げることになった。

表V-1 クリニック開室状況

	平成 24 年度	平成 25 年度
開室場所	長久手 8 号棟 3 階 共同研究室 10	長久手 8 号棟 4 階 共同研究室 7
開室時間	週 3 回昼休み	週 3 回昼休み (別途臨時開室あり)
相談時間	1 回 10 分	
利用予約	予約不要	
対象者	前期：日本語表現 T1 受講生（文学部のみ） 後期：日本語表現 T2 受講生（文学部のみ）	前期：日本語表現 T1 受講生（文学部のみ） 後期：日本語表現 T2 受講生（全学部）
相談内容	日本語表現 T1・T2 の課題に関するこ	
アドバイザー	4 人 大学院生・学部 4 年生	7 人 大学院生

1-1-2) 支援の方針

クリニックは「自立した書き手を育成する」という目的達成のため、以下の方針に基づいて支援をおこなっている。

- ① アドバイザーとの「対話」によって文章の修正箇所を、書き手自身が特定できるよう

支援する。

- ② 文章の書き手はあくまでも「書き手自身」であるという考え方から、クリニックでは添削をおこなわない。

③ アドバイザーの助言を取り入れるか否かの決定権は「書き手自身」にあるという考え方から、クリニックは結果としての評価には責任を持たない。

受講生全員に配付したチラシ（図V-1）には上記①～③を明記して、学生に開室の目的を周知するとともに、クリニックの利用方法については、チラシ配付に加えて授業担当者からも指導している。

日本語表現 T1-T2 受講生対象

小論文・レポートの
「どう書いたらいい?」
「どう書いたらいい?」をサポート!

予約不要

日本語表現 T1-T2

ライティング・クリニック開室のお知らせ

全学共通修得科目「日本語表現 T1-T2」の課題（小論文・レポートなど）を作成をサポートする「ライティング・クリニック」を開室します。作中の小論文やレポート、発言資料を持参して質問する「ライティングの相談会」です。また、提出物の評議やアドバイスも受けられます。お問い合わせは、担当教員まで。お問い合わせ用紙「書類A(裏面)」がわからない!「なんから書き始めがわからない」と1人で悩まずに、まずは気軽に相談してみましょう。みなさんの英語を豊かにしていきましょう。

「ライティング・クリニック」とは?

— ライティング・クリニックは
「自己紹介文・自己PR文」を目標にします!

1. 文部省の「どう問題なさ」などしたくなるか
を意識した自分の「どう問題なさ」であります。
アドバイザーが支援します。

2. 質問は「どう問題なさ」、又は問題の點を
どう問題なさと見なすか、あるいは何を進路で
あるかなど自身の問題です。

3. アドバイザーは「書類A(裏面)」の文章を読みますが、
その問題として「どう問題なさ」に一致する場合は「ああ、
アドバイザーの意見と問題に一致する問題なんだ」と
アドバイザーの意見と問題に一致するかをかかげ、受講して
あるみんな自身に委ねられています。

期間 平成25年10月4日(金)
～平成26年1月20日(月)

開室日 週末カレンダー参照

時間 1回につき10分
(前書き等がなければ長い)

場所 全学日本語教育部門共同研究室
(英語キャンパス8号4階401室)

相談 内容 日本語表現 T1-T2 の課題に関するご相談

【問い合わせ先】全学日本語教育部門 外山駿子
研究室: 1号棟4階11号室 E-mail: stoyama@misai.sci.u-tokyo.ac.jp

図V-1 ライティング・クリニックのチラシ

1-1-3) 利用方法

学生は以下の要領でクリニックを利用する。

- ① 「クリニック開室カレンダー」で開室日時を確認し、直接来室する（予約不要）。
 - ② 来室時には、作成中の小論文やレポート、発表資料を持参する。
 - ③ 限られた相談時間（10分）を有効に使うため、事前に質問したいことを整理しておく。
例えば、「今日は表現のチェックを優先しよう」、「アウトラインを確認してもらおう」など、優先順位を明確にしておく。
 - ④ 来室したら、「ライティングカルテ」（図V-3）に学籍番号・氏名等を記入し、アドバイザーに質問内容を説明する。
 - ⑤ アドバイザーの問い合わせに答えながら、問題点を自分で発見していく。
 - ⑥ 時間がきたら終了。利用回数は無制限なので、同じ課題の相談に何度も来室しても可。



図V-2 クリニック開室風景
学生(右の2名)が発表資料の作り方を相談中

接待日期	2023年7月15日(星期一)接待人姓名:王伟		
姓 名	王伟	性别	男
接待单位	CAU		
事 项	(1) 会议情况(2) 项目进展		
接待内容	与王伟就项目进展和未来合作方向进行了深入交流。		
备 注	赞同王伟提出的项目方向，大力支持。希望在未来的合作中能够取得更多的成果。 -王伟(2023-07-15)		
审 批			

図V-3 ライティングカルテ
相談内容と回答内容をアドバイザーが記録

1-2) 利用実績

1-2-1) 利用状況

平成 24 年度と平成 25 年度の利用状況は、表V-2 のとおりである。両年度ともに前期の利用者が多い。これは、前期の授業では小論文課題を 3 回に分けて提示しているのに対し、後期はグループ発表とレポート作成が各 1 回課されているという課題種別の相違によるものと推測される。しかし、後期は開室日数に比して利用者が少なく、学生利用をどのように増やしていくかが今後の課題である。

表V-2 クリニック利用状況

	平成 24 年度		平成 25 年度	
	前期	後期	前期	後期
開室日数	15 日	25 日	32 日	43 日
利用者数	53 人	4 人	47 人	28 人

1-2-2) 相談内容

アドバイザーは利用者の退室後、前掲の「ライティングカルテ」に、学生からの相談内容および回答を記載する。カルテの記載内容は、クリニック業務を管理する担当教員とアドバイザー全員とで共有する。以下、学生からの相談内容の一例をカルテから転載する（表V-3）。

表V-3 小論文作成過程の相談内容とアドバイザーによる回答（一例）

課題	相談内容	アドバイザー回答
1	先生に「自分の設定した異論に対する反論になっていない」と直されたが、どうしてそうなのか分からない。	・一緒に読み直し、観点を確認した。その上で、異論が「アルバイトは学習時間を減少させる」という観点からずれてしまい、「娯楽時間は学習時間を減少させる」という内容になっていることを確認した。主旨からずれないよう注意した。
1	意見を補強するための具体例を入れたほうがいいか。	・具体例を入れるのであれば、後続の主張と続く、もしくは支持するように使うとよい。 ・構成は完成済みで題材選びが課題。
2	アウトラインは書いたが、第一段落から第二段落につながらない。	・「事実の報告」が「立場の表明」を引き出すものではなく、全く関係のない情報が混入しており、二者につながりが生まれない。 ・自分の「立場の表明」に関わるような事実を実体験などでもよいので持ってくる。
2	字数を増やしたい。	・新聞と他メディアとをピンポイントで対比させる。 ・体験談を加える。 ・主語の明示化。
2	書いていて方向性がわからなくなったり、アドバイスが欲しい。	・主張が弱いので、主張したいことを中心に論を進めるなどを提案。 ・アウトライン内で既に論旨にずれが発生していたので、アウトラインの修正を提案。 ・アウトライン内の一節の表現に訂正と考察が必要と指摘。辞書の活用を提示。
3	反論に対する再反論ができるか。	・導入で「ネット依存」の話が出ているのに、反論では「メール依存」の話になっている。 ・最後に「様々な害を及ぼすため反対」というのは、観点が 1 つに絞れておらず、「ネット依存」か「メール依存」かに統一すること。

3	一貫性があるか。根拠→説得力があるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・「安心感がある」→「防犯になる」ではないことに注意。 ・「犯罪に巻き込まれることが増えた」→どんな犯罪か？犯罪の種類によっては、携帯所持にとってマイナスになる。 ・異論を大きくして書くのはオススメできない。誤解を生む書き方があるので注意。
---	---------------------	--

* 課題1は「アルバイトは学業の妨げになるか」(800字小論文)、課題2は、「新聞は必要ない」という意見に賛成か反対か(800字小論文)、課題3は「子どもが携帯電話を所持することは是か非か」(1,000字小論文)。

上記の相談内容からも明らかなように、学生の来室するタイミングは、小論文を書きあげた後ではなく途中の段階が最も多く、場合によってはアウトラインの検討段階であることも少なくない。つまり、書いた文章のチェックを受けるのではなく、頭の中にある構想をどのような順序でどう伝えればよいか、いわば思考の過程を支援してほしいと望んでいることがうかがえる。

そのために、アドバイザーは相談者から「どんな結論を導き出したいのか」、「それにはどのような事例を挙げればよいか」など一つずつ質問しながら、相談者が「本当に書きたいこと」を、引き出していく役割を担っている。

1-2-3) 利用者の感想

平成24年度前期にクリニックを利用した学生へのアンケートでは、回答者35人の8割以上が「役に立った」と答えており、高い満足度がうかがえた。「今後もクリニックを利用したいか」という問い合わせにも、同じく8割が「利用したい」と答えている。

表V-4 利用者の感想(一部)

肯定的コメント(一部)	<ul style="list-style-type: none"> ・とても親切にアドバイスしていただき、分かりやすくて役に立ちました。 ・小論文を書く自信がつきました。 ・ただ答えを言うのではなくて、誘導が中心で、自分で考えるようにアドバイスしてくれたのがよかったです。 ・改善策を「教える」のではなく、一緒に考えるよう仕向けてくれて勉強になった。 ・自分では気づかない部分を指摘されて、アドバイスをもらえてとても役に立った。 ・なかなか自分で納得がいかないときに利用し、改善点や修正方法をアドバイスしていただけて、とても助かりました。 ・今回利用したおかげで点数が上がりました。今後もぜひ利用したいです。
否定的コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・話すことばなど、指摘されないところもあった。 ・2回目に行ったときはあまり役に立たなかった。内容のことも指摘してほしい。 ・もう少し具体的に答えてほしいです。 ・クリニックに2回持って行ったのに、帰ってきた点数が低かった。 ・アドバイスを活かすかどうか、判断が難しい。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとアドバイザーの数を増やしてほしい。(6人) ・授業後も開いてほしい。(6人) ・10分という時間が短い。(5人) ・毎日開いてほしいです。

自由記述欄（表V-4）には、「とても親切にアドバイスしていただき、分かりやすくて役に立った」など、アドバイザーのサポートを評価するコメントや、「改善策を「教える」のではなく、一緒に考えるよう仕向けてくれて勉強になった」など、クリニックの方針を評価するコメントが多数を占めた。一方、否定的なコメントは、「もう少し具体的に答えてほしい」など、アドバイザーの説明の仕方に問題のあったケースと、「クリニックに2回持つて行ったのに、帰ってきた点数が低かった」など、クリニックの役割を誤解あるいは過大視しているケースとに大別できる。前者は、アドバイザー研修を強化してよりよい支援ができるよう改善に努める必要があり、後者は、クリニックの役割をいま一度利用者に周知することで、利用者の不満を解消していく必要がある。

また、平成24年度前期は、開室と同時に長蛇の列ができるなど利用者が殺到したことから、「もっとアドバイザーの数を増やしてほしい」や「授業後も開いてほしい」など、クリニック機能のさらなる充実を望む声が多かった。これに関しては、平成25年度にアドバイザーの人数を4人から7人に増員したことで開室日数が前年度の2倍になり、利用環境を大幅に改善することができた。

1-3) アドバイザーの研修

現在、アドバイザーの採用は、修士論文執筆を目指した文章作成技術を学ぶ大学院科目「国文学特殊研究I（特論A）」（文化創造研究科文化創造専攻国文学領域科目）、または、「特殊研究I（国文学特論a）」（文学研究科文学専攻国文学コース科目）の単位を修得した者で、かつ、特に能力の高い者に限定している（「VIII 学内連携事業」参照）。開設科目それ自体が研修の役割も担っており、採用者は、学生支援に必要な技能をおおむね修得していることが条件になる。

採用後の実践的な研修は、週1回30分のミーティングの場で継続する。ミーティングにおける研修内容は、以下の3点である。

- ① 1週間の来室状況と相談内容とをそれぞれ担当したアドバイザーが報告し、相談の傾向を全員が把握するとともに、支援の方法に問題がなかったかを検討する。
 - ② 対応が困難だったケースの解決策を全員で考える。
 - ③ 豊週相談が増えそうなケースについてシミュレーションをおこない意見を交換する。
- 採用後の研修で最も重視しているのは、アドバイザーが「教える」のではなく、相談者に「気づかせる」ための、具体的な問い合わせ方である。また、アドバイザーが一方的に話すのではなく常に「対話」を意識することや、課題の提出締切までの日数に応じて助言の



図V-4 アドバイザー研修風景

質量を変えることなど、アドバイザーは日々の経験から様々なノウハウを学んでいる。

1-4) 総括および今後の課題

2年間の開室実績に基づく達成事項を、利用者である学生と、支援者である大学院生の双方向から挙げる。

第1に、教員とは異なる立場の支援者に、気軽に相談できる場を提供できたことである。また、実際にアドバイザーと対話しながら問題点を発見していく面白さに気付いた学生も多く、そうした学生のリピート率も高い。定期的にクリニックに来室する学生の小論文は、総じて高評価であった。

第2に、アドバイザーを務める大学院生にとっても学びの場になっている点である。実際に、「学生の文章を多く読むことで、相手に伝わる文章の書き方を改めて学ぶ機会になっている」、「将来教職を志しているので、学生対応を学ぶ貴重な機会である」など、業務に携わる過程で、この仕事が自分自身の研究や将来に資するとの認識を深めていることがうかがえる。

反対に、2年間の開室をふまえて浮上した課題を、3点に分類して以下に挙げる。

① 学生の利用の仕方に関する課題

- アドバイザーからは、利用者のさらなる意識改革を望む声が上がっている。
- ▶ 「書いたから見てほしい」ではなく、何が知りたいのかを明確した上の来室を望む。
- ▶ 授業担当者の指示やアドバイザーの指摘を、誤解して受け止めているケースがある。
- ▶ ごく稀に、アドバイザーの助言を一字一句そのまま書き写す学生がいる。
- ▶ 添削してもらえる場所だと勘違いしている学生がいる。

上記はいずれも、利用者がクリニックの役割を熟知していないことによる問題である。クリニック開室の目的をいま一度利用者に周知し、クリニックで「できること」と「できないこと」とを具体的にイメージできるよう、教員からのさらなる働きかけが必要である。

② チュータリング技能向上に向けた課題

学生だけでなく、支援者であるアドバイザーにも意識改革が必要な場面がある。学位論文執筆を経験済みの大学院生は、学部1年生の文章の拙さが気になって仕方がないようで、学生に聞かれたこと以上の不備を指摘したり、沈黙に耐え切れずにアドバイザーが話しすぎてしまったりするケースも皆無ではない。

アドバイザーは「指導者」ではなく「支援者」であることを、研修を通して具体的に理解していくのが理想である。ロールプレイングを通してチュータリング技能を修得するなど、より具体的かつ実践的な研修方法の確立が急務である。

③ クリニック運営上の課題

多くの改善点や検討すべき事案がある。

- 相談時間の延長。アドバイザーと来室者双方から「10分は短い」との声がある。1回30分程度の相談時間が確保できるよう、運営方法を見直したい。
- アドバイザーの人員確保と繁忙期・閑散期の人員配置の工夫。現在は、大学院科目の単位修得者に限定しているが、将来的には、各研究科からの推薦者を受け入れたり、能力の高い学部上級生を採用したりする方法を検討したい。
- 来室者の順番待ちへの対応や、予約制の導入。現在の「予約不要・来室自由」のシステムに加えて予約制を採用し、利用者の利便性を確保したい。
- 来室記録の保管方法。現在はA5サイズのカルテで記録をとっているが、過去の来室状況が不明確で効率的な助言ができなかつたり、ミーティングでの具体的なふりかえりが不十分であつたりするなどの課題もある。学生が持参した文章をコピーしてカルテとともに保管するなど、記録の残し方には改善の余地がある。
- アドバイザーの地位向上および報酬の見直し。現在大学院生は、時給950円の短期契約職員として勤務している。職務内容および責任の過重に見合った報酬とは言いがたく、将来的には改善されることが望ましい。

2. 履修相談会

2-1) 概要

全学日本語教育部門では、平成24年度後期より履修一次登録日（前後期各2日間）に各キャンパスでブースを設営し、①開設科目のカリキュラム・授業内容に関する個別相談、②開設科目の時間割に関する個別相談、③開設科目単位未修得者を対象とした学修相談、の3つを目的とした履修相談会を開催している。

表V-5 相談会開催日時および会場

年度	日時	キャンパス	会場
H24 後期	平成24年 9月 11・12日 9~16時	星が丘	3号館5階 情報教育センター PC ラウンジ前
H25 前期	平成25年 3月 26・27日 9~14時		
H25 後期	平成25年 9月 10・11日 9~14時	長久手	8号棟4階 共同研究室7

相談会では、相談員（部門専任教員）が常駐して上記①～③の個別相談に応じるほか、開設科目のテキストやシラバスを自由に閲覧できるように設置したり、希望者に対して時間割表の配付をおこなったりしている。

当初、特に発展科目の履修者数が伸び悩んでいた星が丘キャンパスに限定して試行的に開催していたが、相談会利用者からの評価が高く履修登録希望者も急増したことから、過去2回の実績をふまえ、平成25年度後期からは長久手キャンパスにおいても開催することになった（表V-5）。

相談会場は、星が丘キャンパスでは履修一次登録会場に隣接するエントランスホールに臨時ブースを設営、長久手キャンパスでは履修一次登録会場の1フロア上階にある全学日本語教育部門共同研究室内に設けている。

2-2) 利用実績

キャンパス別の相談会利用実績は、表V-6のとおりである。

星が丘キャンパスでは、平成24年度後期から平成25年度後期にかけて、相談件数自体は216件から108件と半数以下に減少している。しかし、星が丘キャンパスでの「日本語表現T2」ならびに「日本語表現A・B・C」の履修登録数は、相談会が初めて開催された平成24年度後期では555人と、前年度比1.7倍に上昇し、それ以降安定している。これは、履修方法や継続履修の必要性を学生自身が授業時間内である程度理解したためではないかと推測される。

また、星が丘キャンパスで多く寄せられる相談内容は、以下のとおりである。

- ① 発展科目は、応用科目を履修していくなくても授業内容を理解することができるか。
- ② 応用科目と発展科目の内容の違いが知りたい。
- ③ 発展科目の中で履修の順序は決められているか。

星が丘キャンパスでは、履修登録会場であるPC教室の隣に相談会ブースを設けていることから、感じた不安や疑問などを気軽に相談する学生が多い。しかしこれらは授業中に説明している事項であることから、徹底周知には至っていないこともうかがえる。

一方、平成25年度後期に初めて開催した長久手キャンパスの相談件数は3件にとどまり、星が丘キャ

表V-6 キャンパス別相談会利用実績

キャンパス	開催年度	相談件数	資料配付数
星が丘	H24 後期	216	128
	H25 前期	139	75
	H25 後期	108	61
長久手	H25 後期	3	3



図V-5 相談会開催風景(星が丘キャンパス)



図V-6 相談会開催風景(長久手キャンパス)

ンパスに比べて非常に少なかった。理由としては、相談会会場が履修登録会場と離れており、学生の目に留まらなかつたことが考えられる。

また、長久手会場では下記のような相談が寄せられた。

- ① 必修科目を再履修する場合、クラス指定はないか。
- ② 資格取得のための選択必修科目と必修科目の「日本語表現 T1」が同曜日時間に開講されているが、どちらを優先すべきか。

長久手キャンパスでは再履修の際の手続きに関する相談が主であった。履修登録会場の PC 教室から離れた場所での開催であったためか、必要に迫られて訪れるケースが多い。

2-3) 総括および今後の課題

相談会の開催により、履修登録期間中に学生と教員が顔を合わせる場が生まれ、日本語表現科目の継続履修の必要性について追認させたり、履修に際しての不安を取り除いたりする機会となった。一方で、各キャンパスにおける今後の課題としては、長久手キャンパスでは利用者を増やすこと、星ヶ丘キャンパスでは授業中におこなう開講科目について説明の仕方を工夫することが挙げられる。また、この相談会は、新設された「日本語表現 T1」再履修者への学修支援として、再履修者が抱える問題を教員が把握し、指導する機会にもなるだろう。しかし両キャンパスとも再履修者からの相談件数は極めて少ない。

これらの課題を解決するためには、日本語表現科目のカリキュラムや相談会の開催について、授業時での説明を徹底するとともに、学生が利用しやすい開催時間やそれに対応した相談員の配置、長久手キャンパスでの開催場所の変更も検討しなくてはならない。